

2025年度

入学試験問題  
(A日程午後)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん<sup>らん</sup>に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」<sup>しゅうりょう</sup>の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

アメリカのレイチェル・カーソンという人が書いた、『沈黙の春』という本があります。一九六二年のシュツパンですが、カーソンが調査、執筆をしていた一九五〇年代はまだ第二次世界大戦が終わったばかりの頃でした。アメリカは、その合理主義、効率的な生産体制、大規模な機動力などによって、第二次世界大戦の戦勝国となり、世界のリーダーとなりました。アメリカの国民は自信に溢れ、さらなる発展をキタイしていました。農業生産も同じ動きの中にあり、生産力アップのために、殺虫剤が大量に生産され、大規模に撒かれまし  
た。生物学を学んだレイチェル・カーソンはその問題に気づき、徹底的な調査をおこなった結果、こういうことを続けていたら、野山から動物はいなくなり、私たちの子供によい環境を残すことはできないと確信しました。カーソンはそのような未来を、鳥がいない春にたとえ、「沈黙の春」ということばで表現したのでした。

環境問題がみなに共有されている今日と異なり、環境を守ろう、動植物を守ろう、という空気のまだなかった二〇世紀の半ばにあって、農業の問題を指摘したカーソンは、殺虫剤を作る企業や研究者のヒハンの的になりました。農業のためになることをすることが何が悪いのだ、アメリカ社会の進歩をなぜ邪魔するのだ、というわけです。ひどい中傷もありました。しかしカーソンはへこたれませんでした。その頃、アメリカの大統領はジョン・F・ケネディといい、四〇代の若くてさっそうとした大統領でしたが、彼は、カーソンの『沈黙の春』を読み、感銘を受けて、ただちに殺虫剤の使用制限の法律を通したのでした。

そして、これ以降、世界は環境のことを考えるようになったと言つてよいと思います。カーソンの書いた一冊の本が世界を変えたのです。彼女は自然のすばらしさ、とくに生物のすばらしさを深く理解した人で、その文章は論理的であるだけでなく、詩のように美しくもあります。

そのカーソンの数あるすばらしいことばの中でも、私がとくに好きなのは『沈黙の春』にある次のことばです。

「私たちのすんでいる地球は自分たち人間だけのものではない」。

私は、よくモンゴルに調査に行くのですが、あるとき、現地のお宅にお世話になりながら調査をしたことがありました。ある日、そのお宅のスレンさんという奥さんが、私を山菜採りに誘ってくれました。一緒にギョウジャニンニクを採ったのですが、地下の部分を食べる日本と違って、モンゴルではギョウジャニンニクの葉を摘んで食べます。そのときにスレンさんが言ったことばがとても印象に残りました。「葉っぱを全部とっちゃだめよ。来年もとれるように、少しだけ摘んで、あとはとっておく」。

東北地方で山菜採りを楽しむ人も、同じことをよく口にします。自然へのこうした姿勢は、アイヌの物語にも、よく表れており、野上ふさ子著の『アイヌの贈り物』にも読み取ることができます。私はこの本を読み進めていて、ギョウジャニンニクについて書かれたページで声をあげそうになりました。

ある村で、立派な家の奥さんが急病になりました。それを知ったマズしい家の少女は、山菜をもってお見舞いに行きました。お見舞いに行った奥さんの家で、娘はギョウジャニンニク、ウバユリ、ヤチブキという三人の植物のカムイ（神様）の言葉を聞きます。それによれば、その奥さんは山菜を採りに行くときと採り尽くしてしまい、持ち帰ったものを腐らせるので、カムイが罰を与え病気になったのだということでした。そのカムイの話の中に次のようなことばがあります。

④

なんという符合でしょうか。あのカーソンのことばそのものです。

私たちはアイヌの社会、文化、歴史などをほとんど学ばずキカイを与えられていません。私も不勉強ですが、はっきりしているのは明治政府が北海道を開発する過程でさまざまな形でアイヌの生活を奪ってきたということです。たくさんの不正義と差別がありました。世界的にみれば、ヨーロッパ文明による、たとえばアメリカ、アフリカ、アジアへの侵入によるものと同じ図式です。そこにはつねに不正義と蔑視、それに基づく横暴と暴力がありました。

ここでは政治や戦争については触れないで、自然についての態度を考えたいと思います。ヨーロッパのキリスト教世界は人間を神の姿をした最高の被造物とし、地上の動植物を支配する責任があると考えました。そうした文化の中で、自然から人間に役に立つ物を見つけて利用することを「開発」と呼び、よいことだと考えました。高い山に登ることを「征服」と呼び、宇宙に行くことを「ミッション（使命）」と呼ぶことから、その精神が読み取れます。また、自分たちの文化を一番と考え、アジアやアフリカ、アメリカなどを低くみていました。地元の人たちになじみのある山や湖などを見つけると、「人間の発見」と言い、勝手に名前をつけたことも、その表れでしょう。エベレスト山も、ビクトリア湖も、マツキンレー山もそうした名前の例です。

近代以降のヨーロッパの人々は、他文化の人々が持つ、自然に対する異なった考えを、迷信であるとして切り捨てました。たしかに迷信があったことは事実で、たとえば、日食の原理を知らない社会の人々は世界の終わりが来たと恐れおののきましたが、ヨーロッパ人はそれを自然の原理を理解しない愚かな態度だと断定しました。人類史の中でヨーロッパの文明と文化の果たした役割はきわめて大きなものがあり、私たちもその恩恵にあずかっています。その科学的な姿勢は高く評価されますが、一方で、自然に対する姿勢という面では他の多くの文化より傲慢な面があると感じます。

二〇世紀の後半になって、人口が増え、環境問題が発生し、資源やエネルギーの枯渇が大きな問題となってきました。地球が有限であることに人類が初めて気づいたのでした。人口が増え続け、物資やエネルギーを浪費し続けられ、限界があるということがまぎれもない事実であることがわかりました。

そうした動きの中で、地球を我が物顔で支配するような態度はまちがっているのではないかとということに気づいたのがレイチェル・カーソンでした。その叡智は世界を変えるほどの影響力を持っていました。⑤カーソンが突然現れて、何もなかったところからそういう認識に到達したわけではありません。多くの先人が研究して積み上げてきた学問や、思索によって深められた哲学を彼女が学んで到達したのです。

ところが、そうした欧米の文化の到達点とも言えるすばらしい自然観は、皮肉なことに欧米人に蔑視されてきた少数民族が当たり前に持っていたものでした。アイヌの人々にとつて、世界は人間だけのためにあるのではないというのは、当然すぎるほど当然のことでした。

先にあげたカムイのことばの中に、欲張って山菜をとり尽くすことだけでなく、家に持ち帰って腐らせることを戒めることばがあります。これは食べられないほどの食料を買い、食べ物を大量に廃棄している私たちの生活への警告と読むことができます。食べ物ばかりやすい例ですが、もちろんそれだけではありません。熱帯林の樹木を大量に輸入していること、中近東から膨大な量の原油を輸入していることもまったく同じことです。

大和民族は欧米のようになることを「近代化」とする一方で、アイヌ文化を無視するどころか蔑視してきました。アイヌ文化を法的に認めたのはなんと明治維新から約一二〇年も経った一九九七年のことなのです。

それにしても、自分たちの国に古くから住む人たちに学んでいれば、日本列島の自然にこれほど迷惑をかけなくてもすんだと思うと、複雑な気持ちになります。私たちはアイヌ文化に流れる自然観を謙虚に学ぶべきだと思います。

(高槻成紀『動物を守りたい君へ』)

\*アイヌ……主に北海道に居住する先住民族。

\*被造物……神によって造りだされたもの。

\*叡智……高い知性。

\*大和民族……日本民族。

問一 —— 線部1〜5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部①「アメリカ社会の進歩」とありますが、どのように進歩をとげてきたと述べられていますか。それが示されている一文を本文からさがし、初めの五字を書きぬきなさい。(、、。。「」は字数に数えます。)

問三 「沈黙の春」について、次の(1)・(2)について答えなさい。

(1) 「沈黙の春」ということばを次のように説明しました。(、)にあてはまるように、本文のことばを使って二十五字以内で答えなさい。(、、。。「」は字数に数えます。)

鳥がいない春をたとえた「沈黙の春」ということばは、農業生産量を重視し続けた結果、  
(二十五字以内) という未来を憂えて表現されています。

(2) このことばが世に広まり、世の中の人々の考え方はどのように変化したといえますか。本文から十五字で探し、書きぬきなさい。(、、。。「」は字数に数えます。)

問四 —— 線部②「スレンさんが言ったことばがとても印象に残りました」とありますが、その理由を説明したものととして最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア スレンさんが言ったことばを聞き、モンゴルの人たちが生きていくコツの中に自然に対する心づかいを感じたから。

イ スレンさんが言ったことばにまで、ものを大切にしようとするカーソンの考え方が伝わっていることに驚いたから。

ウ スレンさんが言ったことばから、モンゴルで生きる人々の習慣をたくさんの日本人に知ってもらいたいと感じたから。

エ スレンさんが言ったことばを聞き、同じ植物でも食べる部位が違っていると摘み方や保存の仕方も変わることに興味をわいたから。

問五 —— 線部③「野上ふさ子著の『アイヌの贈り物』」では、山菜採りについて具体的にどういことを伝えようとしていますか。解答らんにつづくように十五字以内で説明しなさい。(、、。。「」は字数に数えます。)

問六 ④ に当てはまるカムイのことばとして最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア この世界には人間が知らないことがたくさんあるのです

イ この世界は人間が守っていかねばいけないのです

ウ この世界は人間が食べていいものばかりではありません

エ この世界には人間ばかりが生きているではありません

問七 —— 線部⑤「そこにはつねに不正義と蔑視、それに基づく横暴と暴力がありました」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア ヨーロッパの国々は、ヨーロッパ以外の地域を豊かにするために自国の文明を広めたということ。

イ 明治政府は、世界にアイヌの社会、文化、歴史などを広めることをよく思わなかったということ。

ウ 文明の発達した国や地域は、未発達の内や地域を差別し、力づくで支配し続けてきたということ。

エ 他の文明を学んでこなかった地域では、まちがいや差別、乱暴なことも許されていたということ。

問八 —— 線部⑥「その精神」とありますが、それはどのような精神のことですか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

ア 人間が自然を利用して都合よく生きる考え方を批判し、反対しようとする精神。

イ 人間が地上で最も優れていると考え、すべてをコントロールすべきだとする精神。

ウ 人間が地球上のすべての動植物とともに、豊かに生きることを目指そうとする精神。

エ 人間が宗教的な考え方によって、地球環境を保護しなければならぬとする精神。

問九 —— 線部⑦「ない」とはたらきが同じものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア きたないことばを使わないようにしましょう。

イ 必要のないものは片づけてください。

ウ 姉のさりげない動作が母とよく似ている。

エ アメリカへ行く予定だが、英語が話せない。

問十 —— 線部⑧「その科学的な姿勢は高く評価されます」とありますが、なぜ高く評価されたのですか。本文のことばを使い、解答らんにつづくように三十字以内で説明しなさい。(、、。。「」は字数に数えます。)

問十一 ⑨ にあてはまることばとして最も適当なものを次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア むしろ

イ もちろん

ウ ただちに

エ まして

オ おそらく

問十二 本文の内容に合うものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ヨーロッパはアメリカを文化的に低くみていたが、アメリカも同様にヨーロッパを低くみていた時期があった。
- イ ヨーロッパの人々は文明が進んでいない国々に科学的知識を与えつつ、自然への向き合い方を伝えた。
- ウ 日本の人々はアイヌの社会について知ることをおこたり、彼らの文化や生活を否定する行いをしてしまった。
- エ 日本は近代化による自然破壊を反省し、古くからの自然観や生活習慣をとりもどすべきだと考えられる。

問十三 本文の持ちようを述べたものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 具体例や引用を多く取り入れることによって、説得力を持たせている。
- イ 古いできごとから順序よく説明することで、テンポのよい展開となっている。
- ウ 誇張表現を多用することで、事態の深刻さを強調しようとしている。
- エ 本文の前半で提示された問題に対し、後半ではその解決策を提案している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中道良太は希望の丘小学校五年三組の担任を務めている。新年度が始まった間もないころ、良太のクラスの児童である本多元也が一日に三度も教室を脱走する事件を起こした。良太は吉井先生に担任を代行してもらい、元也と一対一の授業をすることになった。

良太が気になったのは、この数日間とは違い元也の元気がないことだった。ふたりだけの授業を始めてから、男の子の表情はずっと明るくなっていた。それが今日はまた沈んでいるのだ。

元也と一対一の授業は、とりあえず一週間と期限が決められていた。最後のかがやきの時間に良太はたずねた。

「どうした？ 来週からまた教室にもどるのが、つらいのかな」

教室で授業を受けていると、息ができなくなるとこの男の子はいったのだ。元也はとがったあごを左右に振った。

「いいえ。クラスのことじゃなくて、うちの親のことです……」

また黙りこんでしまう。なんとか話をつなげたくて、良太はいった。

「本多くんのおとうさんは、立派な仕事をしていて、清崎の街では有名なんだってね」

父親の話をしたら、元也の表情はさらに暗くなった。返事は蚊の（ ）のような声である。

「……はい」

「じゃあ、本多くんもおとうさんに負けないようにがんばらないとな」

男の子は顔をあげた。②にらむような目で、良太を見る。

「ぼくはうちの親と同じ仕事はしたくありません。一日中人が稼いだお金の勘定をするなんて嫌です。あの、先生」

どうやらさわってはいけないところに手をだしたようである。子どもたちはみな自分の家や親の職業に関しては敏感なのだ。

「なんだい」

「夕方にうちの親が学校にきます。ぼくはおかあさんに無理をいって、いっしょに学校にくるつもりです。途中からいいので、話を

きかせてもらって、いいですか」

③これ以上はない真剣な目で、良太を見あげてきた。学年主任の了解は取っていなかったが、良太は返事をした。

「わかった。富田先生に話をしておく。でも、なぜ、本多くんはご両親と先生の話をききたいと思うのかな」

思慮深い男の子は、しばらく黙っていった。

「先生が心配だから」

担任の教師のことが心配？ いったいどういう意味なのだろう。海辺の光が跳ね散る臨時の教室で良太はいった。

「先生のことを心配してくれるのはうれしいけど、どうして本多くんのおうちの人と先生が気になるのかな」

今回の騒動の発端は、なによりも元也の教室からの脱走である。心配なのは元也のほうだ。良太は単純なので、思わず大切な5年3組

を一週間もホウリだしたのは、誰のせいだといいたくなかった。だが、そこでぐっとこらえる。窓の外に目をやって、春の港で心を静めた。

教師は思ったことをそのまま口にできる職業ではない。不用意なひと言で、ふたりきりの授業の成果がゼロどころか、マイナスになるかもしれない。

元也は口にしにくそうに⑤という。

「うちのおとうさんは強いから……」

男の子というのは、いくつになっても繊細で気が弱いものだった。やわらかな髪をなでて、良太はいった。

「わかったよ。じゃあ、おとうさんとトラブルにならないように気をつける」

「先生、すみません。ぼくのことだけでなく、うちのおとうさんまで」

この子はなにかが起きると、すぐに謝る習慣がついているようだった。大人の顔色にひどく敏感なのだ。

「なあ、本多くん。自分がほんとうに悪いと思ってるときしか、謝る必要はないんだよ。いつもすみませんとか、ごめんなさいとかい

うけど、本多くんにだっていいことがあるだろう。それをちゃんといわないと、相手にだって気持ちがつかないんだ」

良太は塔屋の端に移動した。

「ほら、みてごらん。先生と本多くんの間には距離がある。でも、ひと声かけると」

一歩机にすすんで、良太は立ちどまった。

「距離が縮んでいる。さあ、本多くんも立って。それで今の気持ちも、先生にひと言いってごらん」

小柄な男の子はパイプ椅子から立つと、胸のまえで手を組んだ。おずおずという。

「先生、この一週間、ほんとうにうれしかった。大人の人にこんなふうな大事にもらったのは、生まれて初めてだったから、ほんとうにうれしかった」

良太は特別に元也を大事にした覚えなどなかった。もちろん大切な児童のひとりだが、どちらかといえば、学級崩壊をフセグ<sup>2</sup>ために、ひとりきりの特別授業を始めたのである。その程度のもので、この子はなぜこれほど感謝するのだろうか。

「おうちの人は大事にしてくれないのかな」

男の子は鑑<sup>7</sup>のような笑顔で本心を隠<sup>かく</sup>してしまった。

「それは話したくないです。でも、先生のいうとおりかもしれない。自分からなにかをいわなければ、ずっと心は離れたままです」

良太は男の子の目をのぞきこんだ。顔は小学校5年生だが、目には老人のような暗いあきらめが沈んでいた。老いた子はいう。「でも、遠く離れたままのほうがいいこととてありますよね。いくら近づいても、絶対にわかりあえないときがある。だから、大人は世界のあちこちで戦争とかしているんでしょ」

そういわれれば、そのとおりというしかなかった。人間の愚<sup>おろ</sup>かさには限りがない。だが、同時に誰かが子どもたちを教育しなければならぬのも事実だった。不完全な大人が、より不完全な子どもを導くのだ。いつの時代にも学校でトラブルがなくならないのはあたりまえだった。自分のような人間が、教師になつていてのを見てよくわかる。良太はショウジ<sup>3</sup>キにいった。

「本多くんは頭がいいから、はっきりさせておこう。大人だって、子どもと同じようにダメだったり、できないことがたくさんある。それは親も先生も変わらない。みんな自分ではできないことを、これがたいたいといって、子どもに押しつけてるだけなんだ」

元也はうなずいて、さらに一歩まえに踏みだした。表情が明るくなっている。

「でもね、そういう大人を本多くんはやさしい目で見てやってほしいんだ。先にそれに気づいたほうが、大人も子どもも関係なく、相手を許してあげる。それがおたがいにくまくやっていくコツだと先生は思うな。それからね……」

良太も一歩だけ男の子に近づいた。もう手を伸ばせばトド<sup>4</sup>きそうな距離である。

「本多くんには、いつだって味方がいる。それはクラスの友達かもしれないし、先生やおうちの人かもしれない。そういう人はやっぱり大切にしなくちゃいけないよ」

お決まりの言葉だと良太は自分でも思った。人のあいだと書いて、人間と読む。ばからしいなど思ってきた話は、良太の中学時代のオシ<sup>5</sup>の口癖だった。元也は賢<sup>かし</sup>げな顔で、ひとり考えているようだった。

「でも、先生、息がでなくなるとは、どうしたらいいんですか」

逃げ場をなくしたストレスが身体症状<sup>しんじょう</sup>にでてしまう。そんなときに小学校5年生の男の子にができるのだろうか。良太は迷った末にいった。

「逃げちゃっていいよ」

疑い深そうな表情で元也が見あげてきた。良太は意識して笑顔になっていた。<sup>8</sup>

「逃げてもいいけど、誰もいないところまでいったらダメだ。ひとりでもいいから救命ロープになる人を見つけておいたらいいんじゃないかな。そうしたら、こちらの世界に帰ってこられるから」

問題児はわかったのか、わからないのか、ぼんやりと微笑<sup>ほころ</sup>を浮かべていた。そのとき明るい階段室にざわざわと子どもたちの足音が響いた。どこかのクラスが屋上でレクリエーションでもするのだろうか。良太は手すりのあいだからしたに顔をだした。

先頭にいるのは、元也のとりの席に座<sup>すわ</sup>っている木島志乃<sup>しの</sup>だった。元也の真似<sup>まね</sup>をした奥村明広<sup>あきひろ</sup>も沼田悠太<sup>ゆうた</sup>もいる。学級委員の日高真一郎<sup>しんいちろう</sup>は集団の真ん中だった。5年3組の全員が弾むような足取りで、階段をあがってくるのだ。狭い塔屋のなかは、すぐに子どもたちでいっぱいになった。最後に顔を見せた非常勤の教師、吉井が顔をほころばせていった。

「3組はいいクラスですね、中道先生。感心しました。わたしがいいだんじやなくて、子どもたちが自分で、本多くんを迎えにいっていったんです。今日でひとりきりの授業も終わる。来週からは、またいっしょだからって」

ポニーテールを揺らして木島志乃<sup>しの</sup>がいった。

「本多くん、教室に帰ろう」

元也は頬<sup>ほ</sup>を染めて、思いきりうなずいた。感動している子どもの表情を見るのは、とてもいいものだ。良太は幸福な気もちで子どもたちの輪にはいった。

(石田衣良『5年3組リョウタ組』)

\*かがやき……希望の丘小学校の総合学習の名称。

\*富田先生……五年生の学年主任。

\*塔屋……建物の屋上に突出した小屋。

問一 —— 線部1〜5のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部①「蚊の（ ） ような声」の（ ） にあてはまることばを考えて、慣用句を完成させなさい。

問三 —— 線部②「にらむような目」とありますが、このときの元也の気持ちを三十五字以内で説明しなさい。

( )、 ( )、 ( ) 「」は字数に数えます。

問四 —— 線部③「これ以上はない真剣な目で、良太を見あげてきた」とありますが、その理由を次のように説明しました。

( I ) ( II ) にあてはまることばを本文からそれぞれ二字で書きぬきなさい。( )、 ( )、 ( ) 「」は字数に数えます。

先生は自分のことを( I ) にしてくれたと感じているが、父親が学校に来て先生に会うと何かが起こるのではないかと( II ) しているから。

問五 ——線部④「窓の外に目をやって、春の港で心を静めた」とありますが、このときの良太の様子を説明したものと最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 良太は5年3組のことを気がかりに思っているが、元也にそれをわかってもらえず気持ちが落ち込んでいる。
- イ 良太は二人きりで授業をしたことに手ごたえを感じていたが、それを否定するような元也のことばにとまどっている。
- ウ 良太は脱走したことを問題としていない元也に怒りを感じたが、その気持ちをおさえ冷静になろうとしている。
- エ 良太は父親と自分に対して元也が気をつかっていると感じ、元也を腹立たしく思ったことを反省している。

問六 ⑤にあてはまることばとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア へらへら    イ ぼそぼそ    ウ そわそわ    エ たんたん

問七 ——線部⑥「本多くんにだっついていいたいことがあるんだろう」とありますが、良太はなぜこのように言ったと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 元也が相手の様子をうかがって、伝えたい思いを押し殺していることを残念に思ったから。
- イ 元也は教室で何かを言われても意見を言えず、それが脱走の原因になっていると考えたから。
- ウ 元也が心から父親に謝っていないことが、関係を悪くしているのではないかと感じたから。
- エ 元也の父親は立派な方だから、気持ちをしっかりと話すことで認めてもらえる気がしたから。

問八 ——線部⑦「鎧のような笑顔」とありますが、それを説明したものと最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 先生に話をしたところで何も変わらないと、心を閉ざした作り笑顔。
- イ 先生に対する信頼を失い、気持ちが沈んだ老人のような作り笑顔。
- ウ 先生の話に適当に合わせようと、冷めた目つきの作り笑顔。
- エ 知られたくないことを先生にさぐられ、怒りをおさえた作り笑顔。

問九 〰線部X「元也が一步まえに足を踏みだした」、〰線部Y「元也はうなずいて、さらに一步まえに踏みだした」とありますが、このときの元也の気持ちの変化について、生徒たちが話し合っています。①にあてはまることばを十三字で、②にあてはまることばを六字でそれぞれ本文から探し、書きぬきなさい。( )。「」は字数に数えます。( )

- Aさん 元也は良太先生に気にかけてもらったことがうれしかったんだよ。
- Bさん だから自分の気持ちを出すことができ、一歩前に足を踏みだせたんだね。
- Cさん だけど、絶対にわかり合えない相手とは①とも考えていたんだ。
- Bさん そうね。その元也に対して良太先生は否定せずに受け止めてくれていたね。
- Aさん 良太先生は元也の話から、自分たち大人のことを「②」ということばで表しているよ。
- Cさん 飾らずに話してくれたことで、元也はさらに一歩前に踏みだせたんだ。
- Aさん 体も気持ちも互いに近づいて心が開いていったことがわかるね。

問十 ——線部⑧「良太は意識して笑顔になっていく」とありますが、このときの良太の様子を説明したものと最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 逃げてもいいよと言ったものの、元也が本当に逃げてしまったらどうしようかという不安を隠そうとしている。
- イ 父親や先生をいつも気にかける元也に、大人のことは考える必要はないのだとわからせようとしている。
- ウ 逃げることは悪くないということ伝えて、まだ良太に心を許していない元也をなんとか安心させようとしている。
- エ 教師の立場で逃げていいなどと言ってよかったのかという心の迷いを消すために、自分を肯定しようとしている。

問十一 ——線部⑨「元也は頬を染めて、思いきりうなずいた」とありますが、このときの元也の気持ちを五十字以内で説明しなさい。( )。「」は字数に数えます。( )



|   |     |       |
|---|-----|-------|
| 1 | 出版  | シユツパン |
| 2 | 期待  | キタイ   |
| 3 | 批判  | ヒハン   |
| 4 | 貧しい | マス    |
| 5 | 機会  | キカイ   |

問二

|   |
|---|
| ア |
| メ |
| リ |
| カ |
| は |

問三 (1)

|    |   |    |
|----|---|----|
| 野  | 山 | を  |
| 山  | か | 残  |
| から | 、 | せ  |
| 動  | 子 | ない |
| 物  | 供 | い  |
| が  | に |    |
| い  | よ |    |
| い  | い |    |
| な  | 環 |    |
| く  | 境 |    |

問三 (2)

|   |   |
|---|---|
| 環 | た |
| 境 | え |
| の | る |
| こ | よ |
| と | う |
| を | に |
| 考 | な |
|   | っ |

問五

|   |     |
|---|-----|
| 山 | る   |
| 菜 | べ   |
| は | き   |
| 必 | だ   |
| 要 |     |
| な | という |
| 分 | こと。 |
| だ |     |
| け |     |
| 採 |     |

問六

|   |
|---|
| エ |
|---|

問七

|   |
|---|
| ウ |
|---|

問八

|   |
|---|
| イ |
|---|

問九

|   |
|---|
| エ |
|---|

問十

|   |   |   |
|---|---|---|
| 自 | 文 | る |
| 然 | 明 | こ |
| の | や | と |
| 原 | 文 | が |
| 理 | 化 | で |
| を | を | き |
| を | 発 | た |
| 理 | 展 |   |
| 解 | さ |   |
| し | せ |   |
| 、 |   |   |

問十一

|   |
|---|
| イ |
|---|

問十二

|   |
|---|
| ウ |
|---|

から。

問十三

|   |
|---|
| ア |
|---|

問二

|   |    |       |
|---|----|-------|
| 1 | 放  | ホウ    |
| 2 | 防  | フセ    |
| 3 | 正直 | ショウジキ |
| 4 | 届  | トド    |
| 5 | 恩師 | オンシ   |

問二

|    |
|----|
| 鳴く |
|----|

問三

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 親 | を | て | 気 |
| の | 言 | い | 持 |
| 仕 | わ | る | ち |
| 事 | れ | の | 。 |
| が | て | に |   |
| 嫌 | 不 | 、 |   |
| だ | 快 | 父 |   |
| と | に | の |   |
| 思 | 思 | こ |   |
| っ | う | と |   |

問四 I

|   |
|---|
| 大 |
| 事 |

問四 II

|   |
|---|
| 心 |
| 配 |

問九

|   |   |   |
|---|---|---|
| 1 | 遠 | が |
| 離 | く | い |
| れ | 離 | い |
| た |   |   |
| ま |   |   |
| ま |   |   |
| の |   |   |
| ほ |   |   |
| う |   |   |

問十

|   |
|---|
| ウ |
|---|

問七

|   |
|---|
| ア |
|---|

問五

|   |
|---|
| ウ |
|---|

問八

|   |
|---|
| ア |
|---|

問六

|   |
|---|
| イ |
|---|

2

|   |
|---|
| 不 |
| 完 |
| 全 |
| な |
| 大 |
| 人 |

問十一

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| た | こ | 気 | が |
| く | と | づ | 満 |
| さ | で | き | た |
| ん | 、 | 、 | さ |
| の | 仲 | う | れ |
| ク | 間 | れ | る |
| ラ | が | し | 気 |
| ス | い | さ | 持 |
| メ | る | で | ち |
| ー | と | 心 | 。 |

|      |
|------|
| 受験番号 |
|      |